

小岩戸の板碑

中世の祈り



巴川中流域の左岸に位置する小岩戸地区には、地域の人々の信仰を集める「お不動様」があります。不動堂に祀られている碑は、「板碑」と呼ばれ、小美玉市指定文化財（歴史資料）となっています。

板碑とは、石材を板状に加工し、古代インドのサンスクリット文字である梵字で仏や菩薩などの本尊を表す種子、造立の趣旨、造立の年月日などを刻んだ石製の塔婆のことを言います。

本尊の種類としては、阿弥陀如来「キリーク」、大日如来「バン」、地藏菩薩「カ」などがあります。造立の趣旨には、死者の供養を願うものや、生きていくものが死後の安楽を願うものなどがあり、造立は、鎌倉時代から戦国時代にかけての中世の時代に盛行しました。

使われた石材は、秩父産などの緑泥片岩や筑波山麓で産出される黒雲母片岩などで、形状や石材から、「武蔵型」、「下総型・常総型」などと分類されています。

武蔵型板碑は、現存するもので関東全域に四万五千基あまりにのぼり、茨城県では小貝川よりも西の県西地区に多く分布しています。

ここで、小岩戸の板碑を見てみましょう。板状に加工された石材は、青みがかったいることから、秩父産の緑泥片岩とされています。三角形を呈する頭部の下に二条の横線が刻まれており、割れていますが、高さは八十六cmほどです。

線で刻まれた長方形の額内には、上部から蓮台に乗った梵字で阿弥陀如来を表現した「キリーク」、花瓶があります。その下には造立された年号「貞和五年己丑□月」（一三四九）と刻まれています。その特徴から、小岩戸の板碑は武蔵型板碑であり、荒川などの水系を利用した水運で持ち込まれたと考えられています。



武蔵型板碑の分布は、埼玉県を中心に東京都、群馬県などで多くみられ、小貝川より東では、その数は少なく、小美玉市小岩戸のものを含め、水戸市、土浦市、美浦村、茨城町などで散見されます。

小岩戸の板碑の存在は、阿弥陀如来がもつ西方極楽浄土に往生できるという浄土思想の広がりを垣間見ることができま

す。市内では、江戸時代より以前で年代の分かる文化財は非常に少ないことから貴重な文化財の一つと言えます。